

因果性と帰納法

— ヒューム哲学における —

石 川 徹

ヒューム哲学において、因果性の問題と帰納法の問題は、不可分であり、常に同時に論じられる⁽¹⁾。この一見別個の二つの問題が、どのように関連しているかを明らかにし、そこに含まれている問題を取り出す事によって、ヒュームの因果論、さらには、彼の世界像についての理解を、より深める事を本稿の目的とする。

I

ヒュームが、因果論を知性(Understanding)論の中心に据えたのは、我々の認識の主たる部分を占める経験的事実(Matter of Fact)に関する知識が、因果関係に依存しているという確信に基づいている(T 73 ~ 4)⁽²⁾。すなわち、直接経験により獲得された知識を、未経験の同種の事象に拡張する事は、基本的には、原因(結果)から結果(原因)への推理、つまり、因果推理であると主張するのである。しかし、この推理は、あらかじめ存在する因果関係を、帰納的に拡張する事ではない。このような拡張が可能である事が、因果関係を作るのである、とヒュームは言う。つまり、この推理は、因果関係の持つ必然性に依拠するのではなく、むしろ、このような推論ができる事が、因果関係の必然性を生むのであるとされる(T 88)。従って、因果関係は、因果推理により説明され、因果推理は本質的に帰納的であり、よって、三者は不可分に語られるのである。以下、ヒュームの因果推理の理論を要約し、帰納法との関連を見る事にする。

まず、ヒュームは、因果推理を狭義の理性(Reason)⁽³⁾による推理、すなわち、演繹推理から厳しく峻別する。この根拠は、彼の哲学の根本原理の一つである分離の原理、つまり、想像において、分離可能なものは、別個な存在であるという原理である⁽⁴⁾(T 18)。これにより、推理の二項である、原因と結果にあたる対象⁽⁵⁾は、相互に切り離して考え得るが故に、論理的に独立な存在であって、それ故、一方から他方を演繹的に導く事は不可能である事が証明される。さらに、思惟可能であれば、現実にも可能であるという原理により、演繹推理は、その否

定が矛盾を含み、思惟不可能であるのに対し、因果推理は、それ以外の可能性が思惟可能であるという事から、両者の区別に、否定の思惟可能性という、より具体的な基準を導入するのである（T80～2）。

以上の道具立てにより、ヒュームは、従来論理法則と同列に置かれていた一般因果律（すべての出来事はその原因を持つ）及び、「同一原因—同一結果」原理の根拠を批判し、因果関係を論理的関係から引き離し、独自の地位を与える。この因果関係を、それ自体として問題とした事に、ヒュームの第一の功績があるのである。

しかし、因果推理の理性的基礎づけを奪う一方で、その、人間の認識における比類なき重要性が強調される（T97, Abstract 650）。故に、因果推理の新しい根拠が求められねばならない。ヒュームは、具体的な個々の因果推理が、いかになされるかを解明していく事により、これを行い、推理の基礎となるべき因果関係の本性を見出そうとしたのである。

ヒュームによれば、因果関係の観念は、二つの時空的に連続し、継起する対象の観念と、これらの観念の間の必然的結合の観念とに分析される。ところで、ある観念は、それが有意味であるためには、それに対応する印象が存在しなければならない⁽⁶⁾。ところが、因果関係を他の関係から区別する当のものである必然的結合の観念は、それに対応する印象を見出す事ができない。しかし、必然的結合は因果関係にとって不可欠のものである。よって この因果的必然性の問題を中心に、ヒュームは、因果推理のメカニズムの解明を進めていく。

個々の因果推理は次のように定式化される。(1)類似する二種の対象が、常に接続継起の関係にあった事の観察（恒常的连接（Constant Conjunction）の経験）。(2)恒常的连接の経験が原因となり、精神に、二つの対象の観念を連合させる機構である習慣（Custom）が形成される。(3)二種の対象のうち、一方の対象が現前する。(4)その対象の印象は、すでに形成されている習慣を励起し、もう一方の対象の観念を導く。(5)この観念間の推移は、不可避的、自動的、無意識的におこり、この過程の強制感、被限定感という精神の内的印象が、因果関係の必然的結合の観念の源泉となる。つまり、因果的必然性は、対象間の関係ではなく、精神内の必然性を対象に投影しているにすぎないとされる。

以上のヒュームの説明は、習慣、内的印象といった、心理学的用語を含んでいるため、因果関係を単なる主観的判断に還元したとの批判を受ける。しかし、ヒュームの理論は、そのような批判によって、斥ける事のできない重要性を持っている。以下では、ヒュームの理論の含む問題を提示しつつ、彼の因果論の構造を明らかにしていきたい。

II

ヒュームの因果推理を命題の関係として考え直してみよう。推理の前件は「これまでに経験されたA種⁽⁷⁾の対象は、B種の対象と恒常的に接続していた」であり、後件は「現前するA種の個別的对象に、B種の個別的对象が接続するであろう」となる。この推理が、理性的、すなわち、演繹的でない論拠として、前述の他に、この二つの命題を論理的に結びつける命題の欠如が挙げられる。もし、経験された限りでの恒常的连接から、普遍的恒常的连接への論理的拡張ができれば、そこから、個別の例は論理法則に従って導出される。つまり、推理の前件と後件を、論理的に結びつける事ができる。この拡張を可能にするのは、ヒュームによれば、「未来が過去に類似する」(T89)という自然斉一性である。しかし、ヒュームは、この自然斉一性を証明し得ないものとし、従って、因果推理が演繹推理として定式化できない事を明らかにしたのである⁽⁸⁾。以上の事から、ヒュームが因果推理に独自の資格を与えているのは、そこに、経験された恒常的连接の拡張、すなわち、帰納推理を含み、かつ、その推理が演繹的に定式化できないという所から生じている事が明確になった。ただし、ヒュームは、理性的推理を数量関係、因果推理を事実関係にふり分けており、両者の区別が適用の対象領域にあるかのように述べているが、これは、明らかに演繹推理の過少評価である。推理が演繹的か否かは、推理の前提が経験的か否か、また真か偽か、という事とは無関係である。つまり、因果推理の独自性は経験的事実に適用される事にあるのではなく、それが、経験的事実に関する帰納推理を含むところにあるのである。

さて、ヒュームの理論では、因果推理の前件と後件をつなぐ役割は、習慣が担う事になる。印象Aの生起が、常に觀念Bの連想を導くよう、習慣が形成されているからである。従って、因果的必然性は、単に主観的な必然性というのではなく、習慣という精神の事実における必然性に移行されたというべきである。そして、この習慣の必然性は、事実における必然性、すなわち、因果的必然性であるが故に、再び同じ分析が可能であり(T169)。結局、無限遡行に陥らざるを得ない。この意味で、ヒュームの説明は循環的であり、不十分である。しかし、この不十分さは、次にみる因果関係の仮設的性格を考えれば、致命的とは言えない、と思われる。

III

因果推理の本質が、帰納推理にある事。個々の対象間の因果関係を因果関係たらしめている当のものが、因果推理の生み出す、内的印象である必然性である事。ここから、以下の事が帰結するように思われる。すなわち、個別的な対象のある組(A_1 , B_1)が因果関係にあるとの言明は、A種とB種の対象が恒常的に接続し、(A_1 , B_1)はその一つの事例であるという事

を意味する。逆に言えば、恒常的連接を抜きにしての単一の事象それ自体には、因果關係を認め得ない、との意味になるであろう。つまり、因果推理の本質が帰納推理であるのに平行して、因果關係の本質は恒常的連接にある、と解釈する事ができる。

さて、この恒常的連接とは、一体いかなる種類のものであるだろうか。言い換えれば、ヒュームが、因果關係と認めるのは、どのような恒常的連接であるだろうか。一つの答は、恒常的連接が完全に普遍的な場合という事である。これは、ヒューム自身が、我々の有する因果的知識を、絶対的に真ではないものとして認めている点から、主張される。なぜなら、この解釈の下では、いかなる事象についても、それが因果關係であるとの主張は、これを例として含む、全称命題が検証不可能である故に、真であると認める事が不可能となるからである。しかし、一方、この解釈の下では、ヒュームの因果論は、単に因果的知識の蓋然性を主張するより以上の強い懷疑論、不可知論と解釈しなければならない。これでは、合理論への反対と言う、ヒュームの一つの側面は生かされるが、因果論を事実に関する論理学として、基礎づけようとするヒュームの意図は損なわれてしまう。

そこで、ヒュームは違う選択をしていると考えられる。彼は因果關係を、過去の恒常的連接の経験と、必然的結合とに分析したのであった。先の見地によれば、この両者は特に分ける必要のないものである。なぜなら、その場合、因果關係は、普遍的恒常的連接なのであるからである。ここから、次のような解釈が可能であるように思われる。つまり、普遍的恒常的連接が認められれば、因果言明は真である、しかし、この条件は現実には充足し得ない。ところで、恒常的連接が経験され、かつ、反例が存しない時、これは上記の条件を満足してはいないが、反するものでもない。すなわち、直ちに、因果關係たり得ないと結論づける事もできない。従って、経験された限りでの恒常的連接を、因果關係として、仮設的に受容しておく事は可能であるし、また、行動原理としても、実践的に有利である。そして、現実のメカニズムとして、この仮設的受容は、習慣の形成及び働きとして、具体化されており、その徴表が必然性の観念であると言えよう。以上の解釈は、ヒュームが経験の蓄積による知識の修正、発展を認めている事と合致しているし、このように解してこそ、因果的知識は、絶対的知識 (Knowledge) と区別された蓋然的知識 (Probability) あるいは、信念 (Belief) であり得、しかも、そうしたものとして、積極的意味を持ち得るのである。

IV

さて、以上により、ヒュームの因果推理が帰納推理であり、それに平行して、因果關係が恒常的連接を意味すると解され得る事、それが、必ずしも懷疑論に陥るわけではない事が明らか

になった。次の問題は、この理論が因果関係の説明として十分であるかどうかである。

直ちに、二つの問題点が挙げられよう。一つは、単一の事象における因果関係の問題である。因果関係が、恒常的连接を本質とするならば、個々の因果的事象は、因果法則をとおして、その一例という以上の意味を持ち得ない事になる。しかし、因果関係とは、この出来事が、あの出来事を引き起こす事ではないのか。我々が、日常の生活で問題にする対象は個別的なものであり、主として、特定の時空的に限定された現象のこの原因、あの結果こそが問題となるのである。勿論、個別の事象を扱うのに、普遍的な因果法則は欠くべからざるものである。しかし、因果関係の関係項が、個別的な出来事であるとする日常的確信が正しいとすれば、普遍法則の側からのみで、因果関係が説明可能であるとする立場には無理があるように思われる。それに加えて、ヒュームの場合には、次の問題がある。つまり、因果法則は個別的経験の積み重ねより得られるが、しかし、一回性の事象、あるいは、少なくとも、第一回の経験において、複雑に混合した現象の内から、未来の経験において、恒常的に连接するであろう対象の組を、どのようにして選び出す事が出来るであろうか。しかも、これが可能でなければ、因果関係は全く認識できない事になってしまうであろう。

第二の問題点は、因果関係が恒常的连接を含意するとしても、逆、すなわち、恒常的连接が因果関係を必ずしも含意しない事は明らかであるように思われる事である。もし、私が毎朝、同じバスで同じ人に出会うとしても、私とその人の間に因果関係を認める事はないであろう。従って、因果的连接と偶然的连接を区分する必要があるが、ヒュームの立場では、この区分をなすのは、きわめて、困難であるように思われる。

この二つの問題は、因果関係の知覚、因果命題の意味等、種々の異った問題を含み、簡単に答える事はできない。そこで、ここでは、これらの難点が、ヒュームの立場で、どこまで答え得るか、それを考察してみるにとどめる事にする。

第一の問題について、ヒュームは唯一回の実験に基づき、因果関係が認定しうる事を明確に述べている（T105）。十分に注意深く実験を行なった時という条件付きではあるにしても、ヒュームが因果関係の直接知覚を否定している事と考え合わせると、奇妙な主張であるように思われる。ヒュームの説明は、我々は多くの事柄について、因果的知識を得ており、そのような知識に基づいて、一回の事象についても、因果関係を認定できるという事である。この説明は、一回性の因果関係が他の全ての経験に先立って認められるのではない点で、ヒュームの全体の理論と、直ちに不整合というわけではない。しかし、十分ともいい難い。何故なら、因果関係の本質が、恒常的连接にあるならば、過去に経験された恒常的连接と、この唯一回の現象が、同じ因果関係という概念のもとに包摂されるためには、唯一回の現象も恒常的连接をしな

なければならない事になるからである。そして、勿論これは経験によって示されていない事である。従って、この一回の現象と、それとは別種の恒常的接続は、何らかの別の仕方で結びつけられねばならない。つまり、唯一回の事象が恒常的接続をするとの予想がたてられねばならないであろう。そして、この予想は別種のを結びつけている故に、因果推理の単純枚举的帰納ではなく、類推（Analogy）⁽⁹⁾による推理が働いていると考えられる。ヒュームは、類推を類似のみに基づく、より弱い推理として認めている。そればかりか、多くの個別的对象を、一つの種にまとめあげるという点で、因果推理そのものにも、本質的に含まれているとする。この類推の働きを認める時、一回性の事象に関する問題は、ある程度解消するようになる。というのは、因果関係の意味⁽¹⁰⁾が、十分知られている際には、この関係を満たし得る可能性を持つものとして、類推により、対象の組を、仮設的に指定する事は、十分に可能であり、このような性格づけは、先の因果関係一般の仮設的性格づけと、整合的であるからである。事実に関する因果法則が、絶対的に真になり得ないからといって、そのような法則なしで済ませる事ができないように、個別因果関係についても、事情は同様であると言えよう。この理解は、単称因果言明をめぐる次のデビッドソンの説⁽¹¹⁾とも整合的であるように思われる。

デビッドソンは、因果関係が個別的な出来事の間で成立するという、一般的に承認されている信念と、因果関係を必要十分条件による分析でとらえていく方法との間が、うまくみ合わないという点を問題とする。例えば、「スミスが梯子から落ちて死んだ」という時、出来事として考えれば、原因はスミスの落下であり、結果は彼の死である。ところが、必要十分条件による分析では、スミスの落下は、彼の死の十分条件、すなわち、完全な原因ではない。何故なら、落下の高さ、体勢等、条件が異っていれば、スミスの死が起きなかった場合があったであろうからである。彼の死の十分条件は、スミスの体重、落下の高さ、地面の固さ等、様々な条件の全体であり、スミスの落下は、十分条件の必須の一部に過ぎない⁽¹²⁾。しかし、現実の出来事として、スミスの落下は、彼の死を引き起こしたのであり、十分条件を備えたものである。従って、先の言明は、必要十分条件により考えれば、状況の不十分な記述にすぎぬが、出来事の関係として考えれば、真でなければならない。

この不整合は、出来事そのものを、条件と同一視する事から生じる、とデビッドソンは言う。条件による分析は、因果法則が普遍的含意命題であり、単称因果言明はその例であるとの考えに基づく。もし、この考えが正しいとすれば、次の推論が成立するはずである。つまり、単称因果言明が真であるとすれば、その一般化は法則となる。ところで、先ほどの例において、「スミスの落下が彼の死を引き起こした」という因果言明から、「人間の落下は、その死を引き起す」という因果法則を導けない事は明らかである。人間の落下は彼の死の十分条件ではないからで

ある。従って、単称因果言明と因果法則の関係は、単なる普遍と、その例の関係ではない。単称因果言明は、第一義的に個別の出来事に、因果法則は出来事そのものより、むしろ、出来事の条件に関わるものであると言えよう。

しかし、単称因果言明も法則も、ともに因果関係の表現である限り、無関係では有り得ない。両者の関係についての、デビッドソンの説はこうである。単称因果言明が真である時、その関係項である原因及び結果についての、ある真なる記述が存在し、その記述に現われる述語を使用した一般法則が存在し、当の言明に現われる記述は、その真なる記述と外延が同じ (Coreferential) である、という事である。この解釈に従えば、「我々がある単称因果言明が真である事を知る際に、我々はある法則をさらう (dredge up) 事ができなければならない、という事は帰結しない。帰結するのは、被覆法則があらねばならないという事である。」⁽¹³⁾ つまり、単称因果言明は、特定の法則を含意しているのではなく、何らかの法則がある事を含意しているのである。そして、この際、重要なのは、その法則が何であるかを知らなくともよいという点である。我々が、個々の因果関係を述べる時、その厳密に完全な条件を意識しているわけではないという事実を、この考えは、よく説明する事ができるのである。

このデビッドソンの説は、ヒュームの理論と両立しうる。ヒュームは、原因結果を判定する諸規則として、異なる対象が同じ結果を生み出す時、それは対象に共通する性質による事 (Rule 5)。二つの類似する対象の結果が異なる時、それは、対象が異っている点から生ずる事 (Rule 6) (T174) を述べている。これは、ヒュームが、個別的な出来事間の因果関係と因果法則の間の差異を認めている事を示唆する。ヒュームは、これらの規則を「有効な原因 (Efficacious Causes) と偶然的な事情 (Accidental Circumstances) とを区別する」(T149) ためのものとして規定しているが、この区別は、個別的な出来事そのものをより分けていく、というよりも、原因 (結果) としての特定の出来事の内から、因果関係に無関係な諸規定を取りはずし、より正確に因果的な条件を取り出す作業であると考える事が適切であろう。よって、ヒュームの理論においても、個別的因果関係の認識、即因果法則の認識と言えない事は明らかである。そして、前者が、後者を探求する際の出発点として、必要不可欠である事も同様に確かである。これは、先に述べた因果関係の仮設的性格と符合し、また、デビッドソンの説ともかみ合う。因果関係を恒常的連接とした事から、個別的因果関係が因果法則の例としてしか理解されないように思われるのは、単称因果言明が、多くの場合、その背後の法則が明らかにされぬ内は、確証できないという事情による。しかし、この事は、決して因果法則が明らかにならねば、単称因果言明には意味がないという事と同じではない。これがデビッドソンの説により、明らかにされた事である。ヒュームの論点は、因果関係がいかんにして知られるかという問

題であり、因果言明の意味に関するデビッドソンの見解は、これを補うものであると言えよう。

ヒュームの哲学は、一般に個別的、具体的な経験を出発点とする。そして、因果論においては、恒常的连接という普遍の側から問題が捉えられているように見え、ヒューム哲学の傾向からすれば、異色であるようにも思われる。しかし、ここにおいても、我々の因果的探求の出発点として、個別的な因果関係を取りうるのである。そして、これらの事例が積み重ねられていく事により、仮設的性格を薄め、因果法則へと到達する事ができるのである。また、個別的因果関係の認識が、因果法則へと向う志向を持っている事、すなわち、普遍を基礎とするのではなく、普遍へと向うものでもある事、この事情は、ヒュームの因果論が、本質的に帰納を含んでいる事を示しているように思われる。

V

第二の問題点に移ろう。これは、恒常的连接が、因果関係の必要条件ではあっても、十分条件ではない、と考えられる事から生じる。因果関係について帰納推理が可能であるからといって、帰納推理が可能であれば、すなわち、それが因果法則であるというわけではない。これは、因果的恒常的连接と偶然的恒常的连接が、ごく常識的に区別される点から、当然の事と認められるであろう。しかし、ヒュームによれば、非因果的连接と因果的连接は、恒常的という以外の根拠では区別できないのである。とすれば、この問題を回避する道は二つしかない。一つは、因果的连接と非因果的连接とを区別する別の基準を導入する事。一つは、そもそも、恒常的连接に対して、そのような区別を認めない事である。そして、このどちらをとるかは、因果関係の意味として、何を考えるかという問と直接に関係する。

まず、第一の道は、結局、因果関係の意味が恒常的连接では尽せないという事になり、ヒュームの立場からは離反する事になる。このような別種の基準の候補としては、因果関係の直接知覚（ヒュームの説はこの否定を一つの根拠としている）が挙げられる。ただし、この知覚があらゆる場合に可能である必要はない。ある特定の領域において、因果関係を単なる连接以上のものと知覚しうるとすれば、それを他の領域に拡張する事は、むしろ自然である。さらに、知覚による判定が、常に正しい事も必要ではない。何故なら、因果関係と単なる连接が、基本的に相連するものである事が確かめられている際に、特定の判断は誤っていても、区別をする事自体は正しいはずだからである。このように、因果関係を知覚しうる領域としては、行動の場面等が候補として挙げうるが、これについては、別の機会に論じたい。

ここでは、第二の方向の解決策を検討する。これは、ヒューム理論の枠内での問題処理であり、ヒューム哲学の理解にも役立ち得ると思われる。

この問題を解く鍵は、偶然は「秘密の隠された原因に他ならない。」(T 130)「存在しない事は普遍的に認められている。」(E 96)⁽¹⁴⁾という主張にある。これは、ヒュームが、一般因果律と「同一原因－同一結果」原理とを承認し、その結果、非常に決定論的な世界像を持っている、という事を示している。彼の両原理への批判は、それらが理性により証明できない事に向けられているのであって、個々の場合には、むしろ、積極的に使用されている。その事は、先の因果判定の規則に明らかに示されており、⁽¹⁵⁾また、それこそが、ヒュームの使用する「論理」(T 175)なのである。

この論理を採用すれば、問題は次のようになるであろう。決定論的世界像のもとでは、偶然的な事象は存在しない。現象間の規則性には、そこに何らかの原因が働いていなければならない。しかし、その場合でも、二種の事象間に直接に因果関係が存在すると認められる場合と、そうでない場合の二つが考えられる。後者の場合、事象間の規則的継起は何によって生じるであろうか。両者は、決定論的世界像のもとでは、別系列の因果連鎖によって規定されているはずである。従って、この事象間の規則性は、これらの因果連鎖間の規則性に求めなければならない。これらの因果連鎖により、二種の事象は、恒常的连接をなすよう規定されているはずだからである。そして、因果連鎖もまた、先行する原因に規定されている。これも双方の因果連鎖が、どこかで関係し合っている場合と、そうでない場合とが考えられる。前者の場合、観察された規則性を持つ事象は、いわば、間接的に因果的連関にあり、両者は因果的に説明されるといえよう。そして、後者の場合は、また、同じ議論が繰り返される。すると、あらゆる場合に、規則性が破れ目を示さなかった場合には(破れた場合には、当初の恒常的连接は観察された限りであって、そもそも、恒常的连接ではない事になる。)無限に問いが繰り返されうる事になる。しかし、この場合には、因果的恒常的连接と、そうでない恒常的连接の区別は先送りになっているのではない。何故なら、二つの因果系列が、常に(いわば無限に)接続するのであれば、それは、まさに、普遍的恒常的连接であって、因果関係と呼ばれるにふさわしいからである。⁽¹⁶⁾

ただし、このような解決が可能であるのは、ヒュームの世界像が決定論的だからである。そして、この世界像が、ヒュームの因果論から直接に導出されるものでない事も明らかである。むしろ、因果関係の認識論は、そのみで完結せず、世界が決定論的である事を要請しているといえよう。

VI

以上の考察から、因果推理が帰納推理であるだけでなく、決定論的世界像のもとでは、帰納推理が因果推理たり得る事も明らかになった。しかし、この推理が、観察現象の単純枚举の一

般化のみで尽し得ない事も明らかである。観察現象の規則性は、因果関係の介在を予想させるに留まり、それを明らかにするためには、より詳しい現象の構造の分節化に踏み込まねばならぬ場合も数多い。ヒューム自身に関しても、彼の因果推理が単純枚挙的な推理のみに限られているように見えるのは彼の分析が最も典型的な事例を対象としているからであって、以上の解釈が十分に受け入れられ得るものである事は明らかである。

さて、このような推理による世界の探求の結果、明らかになるのは、どの個別的な出来事が因果関係にあるのか、ではなく、因果関係にある出来事の条件の規則性、すなわち、因果法則である。この個別的な出来事間の因果関係と、因果法則の間の相違を、先のデビッドソンの説は示唆し、ヒュームの説にも同様の事が言える事は先に述べた。J・L・マッキーは、これを出来事(Event)と事実(Fact)の相違として捉え、因果関係は、最終的には出来事ではなく、事実間に成立し、因果的に関連する、出来事の条件のみによる最小完全因果説明(Minimally Complete Causal Account)こそが、目指すべき目標であると説いている。⁽¹⁷⁾これらの説は立場こそ異なれ、個別的因果関係と因果法則の間に、なお解かれるべき重要な問題が残されているという事を示している。しかし、この未解決の重要な問題にここでは、これ以上立ち入る事はできない。おそらく、さらに非常に多くの点にわたる考察が必要であろうと思われる。ここでは、その際考えざるを得ない論点を指摘する事で、この小論のまとめに代えたい。

我々は、世界について、関連しはするが、相互に異なる二つのイメージを持っているように思われる。一つは、個別的な出来事が因果的連鎖をなし、それらがからみ合って作り出す出来事の総体という世界像。もう一つは、世界に関するすべての法則の集合と、法則に与えられる初期値とにより決定づけられている世界像である。前者は個別的出来事間の因果関係が中心にあり、後者は因果法則が主となっている。両者は、緊密な関係を持ちつつも、一致させる事は難しい。しかし、おそらくは、ともに我々の生存に不可欠のものとして排除し得ぬものであろう。我々の行動は主として、個の対象領域に向かい、そして、対象に有効に働きかけるには普遍性を持つ知識が必要不可欠だからである。

両者のイメージを特徴づける、個別性と普遍性、出来事と条件(事実)、少なくとも、この二組の対立項については、因果性との関係において、さらに詳しい探求が必要である。そして、その際、ヒューム哲学においては、外界存在論⁽¹⁸⁾が、ヒントを与えてくれるであろうと思われる。ヒュームでは、外界存在は現象の恒常性と整合性から構築されるわけだが、ここで作られるのは、個別的な出来事や物によって成立する世界である。一方、同時に、これらの現象の性質は、突き詰めるところ、規則性を意味し、因果法則を成り立たしめる根拠となるものである。この一見不思議な構造の中に、因果論の上記の問題を集約的に表現している鍵が見い出される

ように思われる。ヒュームは、問題を提示したのみならず、解決への手がかりもまた置いていたと言えよう。

〔哲学 博士課程〕

註

- (1) Terence Penelhum, *Hume*, Macmillan, 1975, p 38.
- (2) (T) は, David Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed. by Selby-Bigge, P. H. Nidditch, Oxford University Press, 1978, のページ数を示す。
- (3) 理性 (Reason) とは推理能力の事であり, 狭義には演繹推理, 広義には因果推理も含めた推理一般をなす能力を意味する。
- (4) 逆の命題も成り立つ。従って, 思考において分離しうる対象=別個な対象, である。
- (5) 原因と結果が相關語句である事をヒュームは認める (T 82)。従って, 問題は語の意味の関係ではなく, 語の指示する対象間の関係である。
- (6) この原理は, ヒュームの実証主義的見地の表現である。
- (7) ヒュームは, 唯名論の見地により, 抽象一般觀念の存在を否定 (T, Book I, Part 1, § 7) するので, 一般名辞の意味は, 個別的对象の類似性 (Resemblance) 及び習慣 (Custom) により説明される。
- (8) ヒュームが, 帰納法そのものに対して, 懐疑的であったか否かは議論の分かれる所ではあるが, これについては, 別の機会に考察したい。
- (9) 類推について, ヒュームは『自然宗教に関する対話 (Dialogues concerning Natural Religion)』において, 神の存在証明を論ずる際, 詳しく検討している。
- (10) この問題は, なお解決されていないように思われる。原因は結果を引き起こすのであって, 単に連接するのではない。これが恒常的連接のみで尽されるか否か, さらに別の意味を持つか否か, 問題ではあるが, ここでは, これ以上立ち入らない。
- (11) Donald Davidson, "Causal Relation", in E. Sosa (ed.), *Causation and Conditionals*, Oxford University Press, 1975.
- (12) J. L. Mackie は, これにより, 原因を INUS 条件としている。つまり, 原因とは, 必要ではないが, 十分な条件の, 十分ではないが, 必要な部分 (Insufficient but Necessary part of Unnecessary but Sufficient Condition) である。"Causes and Conditions" in E. Sosa, *op. cit.*
- (13) Donald Davidson, *op. cit.* p 92.

- (14) (E) は, David Hume, *Enquiries concerning Human Understanding and concerning the Principles of Morals*, ed. by Selby-Bigge, P. H. Nidditch, Oxford University Press 1975, のページ数を示す。
- (15) 規則 5 以降は, 両原理を仮定したうえでの系と考えられる。
- (16) ここでは, 基準として規則性のみをとっているが, 連接, すなわち, 時空的連接及び継起という基準についても考察が必要である。
- (17) J. L. Mackie, *The Cement of the Universe*, Oxford Clarendon Press, 1974.
ただし, 彼の言う「事実」は, 必ずしも意味が明確ではない。
- (18) ヒュームの外界存在論は, T Book I, Part 4, § 2 に主に述べられている。

Causation and Induction —in Hume's philosophy—

Toru Ishikawa

It is often said that, in Hume's theory, the problem of causation and the problem of induction are always discussed together. In this paper, I aim at acquiring a deeper understanding of his theory of causation, by examining the relation between both problems.

Firstly, in Hume's theory, the nature of causal relation is explained by causal inference. And causal inference is essentially induction. Therefore these three items are closely connected. (I, II)

Secondly, from the above explanation, it follows that the nature of causal relation consists in constant conjunction. If this constancy must be completely universal, Hume's theory may be interpreted as a total scepticism. But it seems that Hume thinks about it in another way. For him, causal statements are suppositive ones founded on the experienced constant conjunctions. Only in this interpretation, we can understand the importance of the theory of causation in Hume's philosophy. (III)

Thirdly, there are two difficulties in Hume's theory; the problem of singular causal relation and the problem of the distinction between a causal constant conjunction and a non-causal constant conjunction. The former is solvable in terms of the suppositive character of causal statements. The latter can be no difficulty so long as Hume's world-view is completely deterministic. (IV, V)

Finally, the remaining problem is the relation between a particular causal event and a causal law. I think, the key to this problem lies in Hume's theory of the external world. (VI)